

「いのちの水のほとりで」

主任司祭 吉池 好高

例年のように夏休みを迎え、七・八月合併号をお届けいたします。「いしずえ」はこの一年、私たちの信仰の水脈を求めて、ご一緒にミサを味わおうとしています。酷暑の中、さわやかな一服の清涼剤となりますように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが皆さんとともに。このような挨拶をもって始まるミサの中に私たちの信仰の水脈は流れています。そのいのちの水を求めて、額に汗して、私たちが見つけたはずの、宝が隠されている畑を耕してまいりましょう。どのような宝にも勝るいのちの水が、日照り続きで乾ききった土の下に流れているのです。その水を求めて、イエスがそこにおられる井戸に近づきましょう。「わたしが与える水を飲むものは決して渇かない。わたしが与える水はその人のうちで泉となり、永遠のいのちに至る水がわき出る」。「主よ、渇くことがないように、また、ここに汲みに来なくともいいように、その水をください」。(ヨハネ 4・14-15) このように私たちも井戸辺に座るイエスに願いたいと思います。十字架上で刺し貫かれたイエスのわき腹から、その永遠のいのちに至る水は湧き出ているのです。今日もイエスはそのいのちの泉のほとりへと私たちを招いておられるのです。

「渇いている者には、いのちの水の泉から値なしに飲ませよう」(黙示録 21・6)。「霊と花嫁が言う『来てください』と。これを聞く者も言うがよい。『来てください』と。渇いている者は来るがよい。いのちの水が欲しい者は、値なしに飲むがよい」(22・17)。いのちの水の値は、このように呼びかけるお方が私たちに代わって、十字架の上で、支払っていてくださるのです。その主に私たちも願いましょう。

「マラナタ。主イエスよ、来てください」。

主イエス・キリストの恵みによって招き入れられた神の愛のうちに、聖霊の交わりに結ばれて、神の花嫁となっていちのちの泉に近づきましょう。そのために、ほてった体に聖霊の風を受けて、小羊の十字架の血によって洗い清められた晴れ着に身を包んで、私たちのために整えられた婚宴の席に進み出ましょう。